

雜 詠

小 泉 英 一

八公がけさより赤きチョッキ着ぬ暮れの澁谷の謎包むごと
ひととせを籠り居りたる妻が身のいつ外出すべき日の来るらむか
秋の陽の降りそそぐ岸邊明るし橋の跨線がまろく割して
水の面を斜に切りて木洩れ陽は湖底の岩を明るく照らす
電車待つホームゆ見ゆるビルの上夕陽浴びつつ旗ゆれて居る
ボッコーと浮べる島の姿よきロビーに見らく清しき今朝を(蒲郡ホテル)
昨通りしこの濱松にまたも来て驛の賣子の顔なじみたり
捕はれの人救はむとけふぞ来し前三年町を車は走る(富川橋趾)
何ものが息するごとし泉の面かそかに動くうごくと思れば
うす暗き店の一ヶ所明るくて商品を照らす光の新味

參賀の廣場

藤 本 水

二重橋上なる橋をこゆるとき見るビル街にこころ遠行く
天皇御親子出でまし期せず廣場なる民にひろがる君が代の齊唱
天皇御親子民に打ち解けお揃ひに微笑みおはすうつつ愛なしき
寫眞班のためなるらしもしばしの間佇立ご會釋の天皇御親子
天皇の御手ひらひらと調子づきいとしなやかにご會釋しましぬ
たちねの母なる皇后繼宮のうしろに退きてご會釋つまし
端正なる繼宮さま參賀人に巧まず巧者のご會釋なされき
國の象徴繼ぎ立ちまさむ日の皇子に外つ國司も既に倚るとふ
童を去り進みます皇太子民の心を常黨らしめ
傳統は血よりも濃ゆく民衆の身のものなりし參賀の憶ひ出

離 愁

藤 岡 富 士 子

生きてあれば又逢ふことも許さると幾春秋を耐へて來にけり
亡き人と思ひあきらめ來し三年忘れ果すべき術なき心
ひたすらに耐へて來にけり此の月日如何に迎へむ今日の吾君
まつしぐら厚きみ胸に縋らむを時失なひて秋をたたずむ
一代かけて相みる目をば吾待たむ如何に苦しく生き難くとも
誠にも愛にもめげぬ一すぢの戀の強さが今は悲しき
幾山川はるばると來し人なるに相みる時はそむき泣くなり
一時とも君を忘れむたまゆらの時給へよと神を祈りき
沖繩と聞くだにゆゆしはるけければ生命つつがなくありませよ君
つつがなく船旅終へて人らみな疲れあらはに船橋を下る

自 然 薯

藤 野 義 純

自然薯のむかごこぼるる畠の隅少ししめりぬけふも晴れつつ
素枯れたる蔓より落つるたまゆらにむかごかそかに音たてしかも
こぼれたるむかごの音はかそかにて畑は少しくしめりを帯びぬ
腹太き犬寝そべれる日向道雲影移るはやくまた遅く
コスモスの花あまた咲く小徑より子は手を振りぬわが乗る汽車に
夕月夜われは獨りの身ながらにこの踏む影の行くに離れず
石の面見る見るうちに濡れゆきていまはあまねく秋の雨なり
夕かけて降りそめたればかまつかのその四圍に湧く紅き雰圍氣
石疊徐々に濡りを擴げゆき夕かたまで雨降りそめし
廊柱によりてたたずむ女人像一人は紅のつよきかほだち